

山で危ない目に遭ったこと

2006.05.07

久家 隆男

(1) 鵬雲崎

1964年11月15日（日）のことである。その日は横尾から蝶ヶ岳に向かった。急坂を登るにつれて雪が深くなり、荒れ模様になった。稜線近くまで登ったときには、風雪が激しくなり、諦めて引き返すことになった。下山時には吹き上げる風が向かい風となり、まともに目を開けられない。アノラックのフードを被っていても冷たい風が顔に突き刺さり、顔をそむけて下った。登りに我々3人が付けたトレールが頼りだったが、降りしきる雪で視界が悪くなり、そのトレールも消えかかっていた。下山の決断がもう少し遅ければ、方向を誤ったかも知れない。しかし、森林限界まで下ると風が弱まり、無事に横尾に戻ることができた。

その日の松本発の夜行列車で帰宅する予定だったので、直ぐに上高地に下った。上高地から松本行きのバスは17時頃の最終バスだった。また、その年のバスの運行はその日で終わりで、翌日から翌春まで運休となる。従って、まさにその年の最終バスであった。

バスの乗客は定員の半分もいなく、既に窓の外は暗くなっていて、日中の疲れで我々は直ぐに深い眠りに落ちて行った。当時のバス道路は、今のように直線的に穿った幾つものトンネルの中の立派な道路を進むのではなく、梓川に沿って崖を削り取った細いでこぼこ道を曲がりくねって進んだ。従って、例えば上高地から新島々まで今は65分で行くが、当時は2時間以上かかった。

上高地から進むと島々の5～6km手前に鵬雲崎という所がある。ここは梓川との高度差が最もあり、昔から眺めの良い所である。ただ、今は奈川渡ダムや水殿ダム等によって、梓川に人工的に水が満たされ、梓川との高度差は数十メートルしかない。しかし、当時は未だダムがなく、狭いバス道路と左下に流れる梓川との高度差は200メートル位あった。

バスが鵬雲崎に差し掛かったとき、私は急ブレーキの衝撃によって目を覚ました。続いてバスは急速にバックしている。何事が起きたかと思ってヘッドライトに照らされた暗闇を見ていると、突然右上から多数の岩や太い木が土砂と共に落下し、前方の道路は一瞬のうちに1m～2m位の高さに覆われてしまった。「ここは落石が多い所で、以前にも小さな崖崩れがあった。先ほどはバスの前に10センチ位の岩が転がり落ちてきたのを見たので、万が一のためにバックした。しかし、道路がこんなに埋まる程の崖崩れが起きるとは思っていなかった。もう少しで梓川まで飛ばされるところだった。」このよう

なことをバスの運転手は興奮気味に語っていた。

たまたま近くに道路工事のためか飯場があった。駆けつけてきた作業員が直ぐにブルドーザーを駆って土砂を取り除き始めた。私はバスの外に出て、夢心地でブルドーザーの作業を見ていた。ブルドーザーは岩や木や土砂を梓川に落としていたが、梓川への崖は80度位の急斜面で、岩などはなんなく滑り落ちて行った。見下ろすと、薄い月明かりで梓川は僅かに光っていたが、河原は闇の中だった。ところが、ブルドーザーが落とした岩が次々と河原の岩に直撃し、線香花火のような光を発していた。私は冷え込んできたのも忘れて、しばらくの間ぼんやりと幻想的な光を見下ろしていた。道を覆った土砂は予想以上に多く、数時間では片づかないことが分かった。また、道路上の土砂を片づけても、右上の崖の状態がどうなっているか夜では全く分からず、バスが通るのは危険である。幸いにも3km程度引き返した地点に迂回できる林道があり、バスは藪原の近くまで真っ暗な道を走って塩尻駅に出た。塩尻でどうにか夜行列車に間に合い、翌朝帰宅することができた。闇の中の出来事であり、眠気と疲れで夢のような夜であったが、恐怖が芽生えたのは翌朝になってからだった。

上高地に入るときに、この話をすることがあります、今の立派な道路では実感が湧かないようです。

(2) 三頭沢

20代の前半には、しばしば沢登りを行った。奥多摩が多かったが、丹沢にも出かけた。入渓するときには足袋と草鞋を履いた。草鞋は濡れた岩に馴染み、滑り難かった。ただ、今の様にヘルメットをかぶるようなことはなかった。

当時はトニー・ザイラー主演の映画「黒い稻妻」の影響を受けて、黒い服が流行していた。山シャツも山ズボンも黒で、岩に取り付いている仲間を見ると、忍者の様に見えた。

あのときはバスを終点の数馬で下車した。当時は三頭山の山腹を巻く奥多摩周遊道路はできていなく、数馬に行く人は滅多にいなかった。数馬は東京の秘境と言われていた。三頭山へは今のように都民の森から登るのと違って数馬から登らなければならず、奥多摩ではきつい山だった。

三頭沢は荒れていて歩き難かった。入渓して1時間位経ったとき、沢の上段に台風で倒れた太い立ち木が斜めにより掛かっていて、その立ち木の上を歩いて行った方が楽で近道に思えた。そこで、私は丸太橋を渡るようにして登って行った。突然、周囲の木々で囲まれた狭い青空が、スローモーションのムービーを見ているように、ゆっくりと傾いて回転を始めた。そして、意識が遠のいた。

どの位の時間が経ったのだろうか。仲間の声で気づき、2メートル程落下したことが分かった。幸いにも柔道の受け身の形で落ちた様であり、落ちた場所もよかつたようだ。

そのため、頭を打つていなく、立ち上がって手足を動かすこともできた。しかし、左の肘が痺れていたので、見ると三角の穴が開いていて、血が噴き出していた。急いでタオルできつく縛った。

下山するにはどうしたらよいか考えたが、この地点では沢を下るのは厳しく、数馬に出てもバスは1日は何本もない。奥多摩湖の方が未だバスの本数が多い。そこで、三頭沢を詰め、山越えして奥多摩湖の方に下った。タオルで肘をきつく縛ったために左手が殆ど曲がらない状態で、どうやって沢を登り山を越えたか全く記憶がない。

なお、当時はゲルピン（古いね、もう死語だよ）であったのは確かだが、山でタクシーを呼ぶという発想は全くなく、長時間でもバスを待つか、それとも歩くか、どちらかしか頭になかった。

どうにか、バスで氷川駅（その後、昭和46年になって奥多摩駅と改称された。）に出て、八王子駅に戻った。肘の血は固まったが、放っておく訳にはゆかない。どこに行っていいのか分からなかったので、八王子駅北口前の交番に飛び込み、病院を紹介して欲しいと頼んだ。交番では直ぐ近くの多摩相互病院に電話してくれて、病院に行くと玄関に医者と看護婦が待機していた。治療を受けて5針縫い、自身寮に帰った。

幸いにもこの程度が私にとって山で最も痛い目に遭った出来事です。ただ、始終山を歩いていれば、軽い打撲や擦り傷等はしそうあり、私は特に膚に傷跡が多いので、家では膚に傷を持つ男と言われています。

（3）鳥海山山麓

昨日はニッコウキスゲの群落に目を奪われた。御浜小屋は1部屋だけの小さな山小屋なので、登山客が少なくても無駄に空いているスペースはない。私は、部屋の隅を確保して、手足を伸ばしてゆっくりと眠った。1993年の夏に一人で泊まった鳥海山の山小屋のことである。

日本海を北上している台風が昨夜の間に津軽海峡を通過する予報だったので、今日は山頂を目指す予定であった。しかし、台風の速度が意外に遅く、朝になっても風雨は止まらない。山頂に向かう人は誰もいなく、次々と下山して行った。明日は月山に登る計画なので、今日は酒田市内に泊まるつもりだ。従って、急いで下山する必要はなく、小屋で天候の回復を待っていた。

小屋に残っている登山客は次第にいなくなり、やがて豪雨は止まって通常の降り方になってきたので、一人で下山を始めた。しかし、昨日登ってきた登山道は急流となり、様子が一変していた。強風は未だ衰えず、唸り声を揚げている。雨具が猛烈に煽られて体がふらつき、恐怖感が生じるときもあった。視界は5メートル位しかない。吹き付ける雨で眼鏡が直ぐに曇った。それでも昨日の道を辿って下れば、鉢立バス停まで1

時間半もかかるないだろと想定し、暫くの辛抱だと思って下った。

その内に、地形が気になってきた。残雪が出てきたが、昨日見た残雪とはどうも感じが違う。この高度では昨日は高い木は殆どなかった筈だ。道幅も狭くなり、道か水路かはっきりしなくなってきた。増水した沢の向こうに道らしきものが見えたので、沢を渡ってみたが、やがてその道も怪しいことが分かった。ここで、迷ったのは間違いないと悟った。

暫くの間、心臓が高鳴った。落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせた。やがて、ここは樹林帯の中で風雨が弱いが、風雨が強くなても登り返さないと帰れないと思った。そこで、少し登り返してから、現在地を確かめるために立ち止まり、地図を広げた。このとき、眼鏡が曇ってきたので眼鏡を指で擦っていたら、その隙に突風が何と地図をさらつて行ってしまった。地図は鳥のように舞い上がり、霧の中に消えた。相変わらず水が流れて落ちているが、今は道らしき所を登っている。しかし、これを辿って再び御浜小屋に戻れるかどうか気になった。しかし、登るしかない。不安を抱えながら登り返してゆくうちに、霧の中にケルンが浮かび上がってきた。下るときには気が付かなかったケルンだが、霧が薄くなって見えるようになったのか、下りと違う道を登ったのか、定かでない。このときは心から助かったと思った。ケルンの横に小さな道標があり、大平登山口とあった。地図にあったような地名だが、記憶が薄い。なくしていない磁石で確認すると、道標が示す道は南に向かっている。バス道路へは西だ。方向が気になったが、とにかくこの道を進めば確実に下山できるだろう。どんな麓に下ってもここよりは遙かにました。道標に従って進み、やがて尾根に上ると、道は右に曲がっている。これは西の方向で、今朝登ったバス道路の方向であることに間違いない。尾根道は樹林帯の中で風雨の影響が少なく、道が雨に洗われていないので、楽に下れた。やがて、車道に出て、30分も下ると鉢立バス停より下方に位置する大平登山口バス停に着いた。